



Title	特殊講義案：都市と村落 (1)
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1966
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77379
Type	manuscript
Note	資料作成年不明（システムの制約のため、発行日には没年を入力した）
File Information	N027_013536.pdf



[Instructions for use](#)

NOTE BOOK

社会志書
学部三四年

東洋大学
昭和十五年

才二卷

附 昭和十五年集中講義
(96.11.17)

4

地也や亦多分地也は全く比較
 したる程盤點を有す。かくの
 本の中央村生海は自然村を最後
 として述べておる。その道
 二村也
 此の二の自然村は明治初年
 昔に弱体化し、特に路裁作
 行はれ、物及の合致は良
 されたと共に、意識は、他人
 意識、自由主義、全統主義の発展
 に伴、美濃に空想して、女
 事は、見のか下事は、未だ
 此の頃の頃の激甚な村に
 よる迄の間に、路裁を
 好の豊地改革の心、に於て

氏
 神
 十
 村
 記
 卷
 二

地区や乃至各地方は全く比較
にない程異なる。かくこの
本の中、村生活は自然村を最後
として考へなすれど、是も過
つて居る。

然しこの自然村は明治以前年々
共に弱体化し、特に最近幾分
行はれ、物産上の合衆化、民衆
の分化と共に意識に於ける他人
意識、自由主義、合衆意識の發展
に伴つて急激に衰微して、ある
事は見のかす事はある。
然しその変化の激甚さは村に
よつて色々異なる。然し我々
の農村地改革によつて甚だし

く新内閣の火入と云ふ事あり。それ程で
ないところもある。近年における~~農~~農
~~業~~の都市化の~~強~~強^がかつたところ
もあり。それ程でないのである。この
交通機関の施設の多かつたところ
と、それ程と云ふ事によつて、^はは
は強つた事である。

(を知らぬ)

是れ二の事、其生活が如何にあつたかは
死の調査しなければ~~な~~な^らぬ。日本
の~~中~~中の~~村~~村^の調査には、その土地に
現に~~と~~と^り十種の集団の各々に
ついて調べれば、その村の死の生活の
全貌の大略を知ることが出来る。
右の十種の内、特に血縁的集団(特に
同族團)に村落構成の根幹を思

井了了は対に （を操作）
北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

はありゆき脱北の北の方の統一を高く視て入る。考察するところから独自の立場をとり出す。

めんとする。考（方）や 生産 年級に

おけ。共同の関心統制の組織に

打落 社会構成の形成を認め見あさん

とす。考（方）もあ。考（方）もあ。考（方）もあ。

北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

北の方の北に必死である。北の方

女 吟 或 水 之 水 心 醉 し

生産手段に於ける変化は経済生活には
大なる変化を伴ふ。此の「家」も
娯楽、教育、社交の生活には強き変化
を伴はぬかも知れぬ。その点を明かに
し、その生活者の任務である。下部
措置に於ける文化は上部措置に於け
る変化を伴ふ。此の「水」は
同也である。

中央部を以ては経済生活の秩序は
常に正しい。これを維持し、その中
に

此の「水」は、
経済生活の秩序を維持するもの
である。此の「水」は、
経済生活の秩序を維持するもの
である。

経済生活の秩序を維持するもの
である。此の「水」は、
経済生活の秩序を維持するもの
である。

経済生活の秩序を維持するもの
である。此の「水」は、
経済生活の秩序を維持するもの
である。

機械の共同利用は共同体的といふか。

大規模の吸水機械も云々か

独多し生活し強一中農の共同生

産の形式と云つては生活し強いと

云々の比較的の意味で、より多く生

産力を高のよめの抑力は限らる

有た。共同生産の形式が共

同体的なり中農は永久に共同生

的であらう。コレホトは共同生か。

耕地や山林や水の共同を共同

体と見るのはおかし。

封建物は共同生に同化せしむると

か苛酷な課税をす。主は農民

を常に最低の生活にしほりけし。生産

技術の相違は有り。額を如何にか中農

の生活を支配した。

評價して位置づけよその必要を云はす。人のありたいを傳へて居る。

村落共同生は或は工業的段階におい

て村落共同生も形式であるか、

二の段階を經過した村落共同生に

去の生活形式である。日本は村落

共同体的性格を脱皮した村落共

合ともある。脱皮しつつある。と云ふ

あり。これを確認するの必要がある。

共同生も生産せしこの中農を

し。額を如何にか中農を如何にか

も早や共同生にせよ。

三十六年度 皇中講義

村落より都市への発展の歴史を語る

社会の発展の歴史

村落

都市

四つの世界の世帯、経済的構造

宗教と国家の発展

村落と都市の同化

(東洋社会の概念)

経済的構造の存在

社会構造の理論

同様の社会

アメリカの都市社会学と東洋社会の発展の歴史

日本人の社会発展の歴史をいふ

三十六年

十月十七日

二四〇一四、五〇